

高等学校におけるボート部活動環境と競技成績との関係

松下 雅雄*

RELATIONS BETWEEN THE GAME RECORDS AND TRAINING ENVIROMENT OF ROWING TEAMS IN JAPANESE HIGH SCHOOL

Masao MATSUSHITA*

Abstract

The purpose of this study was to grasp the relations between the game records and training enviroment of junior rowing teams in Japan. The questionnaire was distributed to 274 head coaches of japanese high school rowing teams. The teams were divided three runk; 1st runked team was to get a place in national high school regatta, 2nd runked team was to only participate in national high school regatta, and 3rd runked team was not to participate in national high school régatta. The number of 1st runked teams was 30 and 3rd runked teams was 32. The data of 1st and 3rd runked teams were used for this study.

The results were summerized as follows:

1. The coach of 1st runked teams instructed more days/week than 3rd runked teams, and stuff meeting of 1st runked teams were held more times than 3rd runked teams.
2. First runked teams practised more days than 3rd runked teams on water, and 1st runked teams held training camp more times/year than 3rd runked team for regatta.
3. First runked teams have more shell boats, specially single and double scull boats than 3rd runked teams. It would be necessary to prepare suitable number of shell boat for the team members.
4. Nmbers of players in 1st runked teams were more than in 3rd runked teams. It would be neccessary to collect many players for selection and competitive spirit in team.
5. First runked teams were mentally and financially supported by the school stuffs and parents more than 3rd runked teams. It would be necessary that parents and school stuffs support the team for improving athletic performance.

KEY WORDS: *high school, rowing team, training enviroment, game record*

* 鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

I. 緒 言

日本における学校期の競技スポーツにおいては、一部の地域で施設・設備等の関係で近年地域の民間スポーツクラブなどで練習が行われるようになった水泳、テニス、体操競技等もあるが、多くの種目は学校単位で、学校の施設を利用して日常的にトレーニングが実施されている。しかし、水上で行われる競技スポーツは、学校体育施設として全国の学校に配備されている体育館、グラウンドなどで練習可能な陸上競技、サッカー、バスケットボール、バレーボールなどと違い、近くに海、湖、河川など練習可能な水域がなければ、その競技に取り組むことは困難と考えられる。

その1つであるボート競技においては、ジュニアでも直線で約1,200 m及び幅が最低でも約50 mの静水域がなければ大会を実施することができない¹⁾。そのため、ボート競技のトレーニングにもこのような水域が必要と考えられるが、練習場所だけでなく、競技力向上のためには指導者、設備、部員数など様々な要因が影響すると思われる。しかしながら、高校期における競技成績がどのような活動環境要因に影響されているのか、今までの報告にはみられなかった。

そこで本研究では、全国の高等学校ボート部の顧問及び監督に対してボート部活動を取り巻く人的、物的環境、そして競技成績の実態を質問紙調査し、高校期のボート競技における部活動環境と競技成績との関係を明らかにすることを目的とした。

II. 方 法

1. 調査対象

平成9年度全国高等学校体育連盟に加盟しているボート部274校²⁾を調査対象とし、171校より回答を得た(回収率62.4%)。

2. 調査方法

各高等学校ボート部顧問に対して平成9年9月下旬に調査用紙を送付し、同年10月末までに回答の上、返送を依頼するという質問紙郵送法により実施した。

3. 調査項目

質問項目は以下に示すとおりである。

- 属 性：所在地(都道府県)、創部年、部員数(学年・男女別)、今年度の最高競技成績の4項目
- 指 導 者：指導者数(学内・学外)、指導者の指導経験年数および競技経験、スタッフミーティングの有無、指導日数など7項目
- 活動・運営：練習日数/週(陸上・水上)、練習時間/日、合宿回数/年、合同練習/年、練習計画の決め方、選手選考方法、部員確保など15項目
- 練習環境：練習場所の状況(流れ、長さ、幅など)、練習場所への移動時間・手段、艇庫の有無、保有艇種・数、トレーニング設備の有無など12項目
- 協力体制：学校、保護者、O-Bの経済的、精神的支援状況など12項目

4. データの集計処理

調査項目「今年度の最高競技成績」の結果から、(1)上位群30校(インターハイ、国体、全国選抜大会で男子または女子の舵手付きフォア、ダブルスカル、シングルスカルのいずれかの種目で入賞)と(2)下位群32校(都道府県大会予選で参加した全ての種目が敗退)を抽出し、両群別に各質問項目を集計処理し、比較検討した。なお、両群のデータ集計、そして群差比較、競技成績と各項目の相関については統計パッケージSPSSを用い、5%をもって有意差ありとした。

III. 結果および考察

1. 指導者について

表1は(1)指導者数、(2)学内指導者数、(3)学外指導者数、(4)指導者における競技経験者数、(5)指導経験年数、(6)指導日数/週、(7)スタッフミーティングの有無について群別に示したものである。なお、スタッフミーティングの有無については「1. する、2. しない」で回答させ、1. に2点、2. に1点を与え集計した。

指導体制に関する項目において群間で有意な差

表 1. 指導者について

	群	平均 (標準偏差)	t 検定	競技成績 との相関
指導者数	上位	2.9 (1.0)	1.511	.190
	下位	2.4 (1.4)		
学内指導者数	上位	2.4 (1.0)	1.837	.230
	下位	1.9 (1.0)		
学外指導者数	上位	0.5 (0.7)	1.255	.161
	下位	0.3 (0.6)		
競技経験者数	上位	0.8 (1.0)	1.729	.221
	下位	0.5 (0.6)		
主指導者の指導 経験年数	上位	10.5 (9.0)	1.371	.177
	下位	7.8 (5.8)		
指導日数/週	上位	5.9 (1.2)	2.904**	.346**
	下位	4.6 (2.2)		
スタッフミーティ ングの有無	上位	1.6 (0.5)	2.928**	.385**
	下位	1.2 (0.4)		

**P<0.01

がみられた項目は指導日数/週とスタッフミーティングの有無であり、指導日数は上位群の方が5.9±1.2日と下位群の4.6±2.2日より多く、ミーティングも1.6±0.5と1.2±0.4と上位群の方が行っているという結果であった(p<0.01)。そして競技成績との間に指導日数はr=.346、ミーティングの有無はr=.385の有意な相関が見られた(p<0.01)。

これらの結果にみられるように、指導者数、指導者の競技・指導経験等は上位群と下位群間で有意な差はみられず、現状では大きな問題でないと考えられる。しかし、指導日数/週においては上位群の指導者の方が下位群の指導者より有意に練習に向いている日数が多く、競技成績とも有意な相関がみられたことより、指導者が練習場所にどれだけ出向き、指導するかは競技力向上には重要であると考えられる。

ボート競技は高等学校以前から競技に取り組んでいるものが少数であること³⁾を考慮すると、初心者である段階の部員に競技力向上のために基礎的な練習方法と技術を指導する重要性は大であろう。また、水上という危険性を考えても指導者が立ち会う必要性は高いと考える。さらには高校での課外活動、学外での活動は引率者なしでは活動ができないことを考えると指導者が練習場所に出

向く重要性が理解できる。そして、スタッフミーティングの実施の有無をみても、上位群の方が下位群より実施しており、複数指導体制で行っている場合はスタッフミーティングを実施し、指導の一貫性、継続性が保たれることが重要と考えられる。

2. 部員について

表2は男女・学年別部員数、部員の確保について群別に示したものである。なお、部員の確保では「1. ないまたはしない、2. あるまたはする」で回答させ、1. に1点、2. に2点を与え、集計した。

群間で有意な差がみられた項目は部員数であり、男女合計の部員数は上位群では26.5±14.4人に対して下位群では15.3±8.7人と、上位群の方が有意に多く(p<0.01)、競技成績との間にもr=.435の有意な相関が見られた(p<0.01)。男子上級生(2, 3年生)の部員数は上位群では9.2±

表 2. 部員について

	群	平均 (標準偏差)	t 検定	競技成績 との相関
部員数 (3・2年男子)	上位	9.2 (6.9)	2.866**	.352**
	下位	4.9 (4.3)		
部員数 (1年男子)	上位	5.2 (4.2)	1.122	.144
	下位	4.1 (3.8)		
部員数 (男子合計)	上位	14.4 (9.8)	2.548*	.316*
	下位	9.0 (6.4)		
部員数 (3・2年女子)	上位	7.9 (5.5)	4.143**	.480**
	下位	3.3 (2.5)		
部員数 (1年女子)	上位	4.3 (3.7)	1.709	.218
	下位	2.9 (2.6)		
部員数 (女子合計)	上位	12.2 (8.4)	3.566**	.426**
	下位	6.3 (3.7)		
部員数 (男女合計)	上位	26.5 (14.4)	3.683**	.435**
	下位	15.3 (8.7)		
部員の確保 (推薦制度の有無)	上位	1.8 (0.4)	.461	.060
	下位	1.7 (0.4)		
部員の確保 (指導者の勧誘の有無)	上位	1.4 (0.5)	-.776	-.101
	下位	1.5 (0.5)		
部員の確保 (部員の勧誘の有無)	上位	1.0 (0.2)	-.553	-.072
	下位	1.1 (0.3)		

*P<0.05 **P<0.01

6.9人, 下位群は 4.9 ± 4.3 人, 女子上級生の部員数は 7.9 ± 5.5 人と 3.3 ± 2.5 人と, 上位群の方が有意に部員数が多く ($p < 0.01$), 競技成績との間にも男子上級生部員数では $r = .352$, 女子上級生部員数では $r = .480$ と有意な相関が見られた ($p < 0.01$)。

これらの結果から明らかなように, 上位群の方が下位群より有意に部員数が多く, 特に男女とも上級生 (2, 3年生) の部員数の差は顕著であり, 競技成績との間にも有意な相関がみられた。このことは1年生は少なくともよいということではなく, 先にも述べたように高等学校以前にボート競技を経験したものが少数であるため, 1年生は試合に参加できるレベルのものが少ないと推察される。部員数の少ないことが競技成績に大きな負の影響をしていることは, 経験者による少数精鋭でない限り, 部内においてより高いレベルの選手を選考しにくいこと, 部内での競争意識を高めにくいことなどによると考えられる。

しかし, 部員確保の方法については制度的にも, 部関係者の勧誘でも群間で有意な差はみられなかった。この点について, 本研究では何ら示唆はえられなかったが, 川西ら⁹⁾が指摘するようにトップレベル選手のボート競技開始動機である「試合を観戦して」, 「先輩に勧められて」等から推察して, その地域でボート競技の知名度を上げる, 例えば大会の開催, 大会で優秀な成績を残すなどが部員を増やすことにつながるかもしれない。

3. 活動・運営について

(1) 練習日数等について

表3は(1)水上練習可能月数, (2)1週間当たりの練習日数, (3)1週間当たりの水上練習日数, (4)1週間当たりの陸上練習日数, (5)年間合宿回数, (6)試合前の年間合宿回数, (7)年間合同練習回数について群別に示したものである。

練習日数等に関して群間で有意な差がみられたのは練習日数/週と水上練習日数/週, 合同練習回数/年そして合宿回数/年で, 上位群の方が下位群より多く行っていた。特に, 合宿回数/年では上位群は 3.9 ± 3.5 回, 下位群は 1.7 ± 1.9 回,

表3. 練習日数等について

	群	平均 (標準偏差)	t 検定	競技成績 との相関
水上練習可能月数/年	上位	8.8 (2.3)	1.842	.238
	下位	7.9 (1.4)		
練習日数/週	上位	6.3 (0.7)	2.204*	.273*
	下位	5.7 (1.3)		
水上練習日数/週	上位	5.7 (1.2)	2.368*	.294*
	下位	4.9 (1.6)		
陸上練習日数/週	上位	3.6 (2.4)	1.493	.199
	下位	2.7 (2.2)		
合宿回数/年	上位	3.9 (3.5)	3.077**	.381**
	下位	1.7 (1.9)		
試合前合宿回数	上位	2.3 (2.8)	3.491**	.427**
	下位	0.4 (0.7)		
合同練習回数/年	上位	1.9 (2.4)	2.462*	.332*
	下位	0.6 (1.1)		

* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$

試合前合宿回数/年では 2.3 ± 2.8 回と 0.4 ± 0.7 回, と有意に上位群の方が下位群より多く行っていた ($p < 0.01$)。さらに, 年間合宿を2回以上実施するが上位では87%であるのに対して, 下位では53%, 試合前合宿を1回以上実施するが上位では77%であるのに対して, 下位では35%, と合宿回数, 試合前合宿回数とも有意に上位の方が実施していた ($p < 0.01$)。そして, 競技成績との間に合宿回数は $r = .381$, 試合前合宿回数は $r = .427$ と有意な相関が見られた ($p < 0.01$)。

上位群の方が下位群より有意に練習日数, 水上練習日数が多く, 合宿回数/年, 特に試合前合宿回数も上位群の方が有意に多く, 競技成績とも有意な相関がみられた。これらのことより, あるレベルの練習量を確保することは競技力向上のためには必要なことであり, 加えて集中的に強化を図る意味で, 合宿を計画・実施することは重要であると考えられる。特に, 試合前に強化合宿を計画・実施することは試合に向けての精神的, 身体的のコンディション調整の点からも試合での成績にも大きく影響すると考えられる。

(2) 部の活動運営方法について

表4は練習メニューの決め方, 選手選考方法について群別に示したものである。

練習メニューの決め方については「1. 指導者

表4. 部の活動運営方法について

	群	平均 (標準偏差)	t検定	競技成績 との相関
練習メニューの 決め方	上位	1.4 (0.6)	1.128	.145
	下位	1.2 (0.4)		
選手選考 (測定データの結果)	上位	2.6 (1.0)	4.664**	.517**
	下位	1.6 (0.6)		
選手選考 (選考レースの結果)	上位	3.1 (0.9)	5.770**	.605**
	下位	1.8 (0.8)		
選手選考 (指導者の意見)	上位	2.0 (1.1)	2.052*	.256*
	下位	1.5 (0.6)		
選手選考 (部員間の意見)	上位	2.3 (0.9)	1.737	.219
	下位	1.9 (0.7)		

*P<0.05 **P<0.01

が計画する, 2. 指導者がアドバイスし生徒が主体的に計画する, 3. 生徒だけで計画する, 選手選考方法の(測定データの結果, 選考レースの結果, 指導者の意見, 部員間の意見)では「1. ほとんど関係しない, 2. あまり関係しない, 3. まあまあ関係する, 4. かなり関係する」で回答させ, 回答したそれぞれの番号と同じ得点を与え, 集計した。

群間で有意な差がみられた項目は選手選考における「測定データの結果の活用」と「選考レースの結果の活用」であり, 「測定データの結果の活用」は上位群の2.6±1.0に対して下位群では1.6±0.6と, 上位群の方が有意に多く活用しており(p<0.01), 競技成績との間にもr=.517の有意な相関が見られた(p<0.01)。「選考レースの結果の活用」では上位群3.1±0.9, 下位群1.8±0.8と, 上位群の方が有意に多く活用しており(p<0.01), 競技成績との間にもr=.605と有意な相関が見られた(p<0.01)。

結果に示されたように, 練習メニューの決め方においては両群とも大きな差はなく, 指導者主導型であった。これは先にも述べたように多くの経験を積んだ部員が少なく, そして水上での競技という一歩間違えば危険性が高い種目特性から, 指導者が計画するか, アドバイスを与える指導者主導型の部運営になっていると考えられる。

選手選考における「測定データの活用」と「選考レースの結果の活用」では, 上位群は下位群よ

り両項目とも活用し, 競技成績にも影響しているという結果であった。これは下位群がそれらの客観的データを活用していないということも事実であろうが, 部員数が少ないという結果と併せて考えると, それらのデータを活用する必要性が少ないと考えることもできよう。

4. 練習環境について

(1) 練習場所について

表5. 練習場所について

	群	平均 (標準偏差)	t検定	競技成績 との相関
練習場所の状況 (流れの強弱)	上位	1.9 (0.4)	-.126	-.017
	下位	1.9 (0.4)		
練習場所の状況 (水面の平穏度)	上位	1.3 (0.5)	-1.920	-.243
	下位	1.6 (0.5)		
練習場所の状況 (直線の長さ)	上位	1.5 (0.5)	-.398	-.056
	下位	1.6 (0.5)		
練習場所の状況 (巾)	上位	1.5 (0.5)	.910	.118
	下位	1.3 (0.6)		
水上交通の規制 の有無	上位	1.6 (0.5)	-.241	-.031
	下位	1.7 (0.5)		
練習場所までの 移動時間	上位	1.7 (1.0)	1.739	.218
	下位	1.3 (0.8)		

表5は練習場所の状況(流れの強弱, 水面の平穏度, 長さ, 巾)及び水上交通規制の有無, そして練習場所までの移動時間について群別に示したものである。

(1)練習場所の状況(流れの強弱)では「1. 強い, 2. 弱い」, (2)(水面の平穏度)では「1. 荒れやすい, 2. ほとんど荒れない」, (3)(長さ)では「1. 2 km以下, 2. 2 km以上」, (4)(巾)では「1. 狭い, 2. 広い」, (5)水上交通規制の有無では「1. ある, 2. ない」, そして(6)練習場所までの移動時間では「1. 1時間以上, 2. 30分~1時間, 3. 30分以内」で回答させ, 1. に1点, 2. に2点, そして3. に3点を与え, 集計した。

練習場所に関する項目においては, 群間で有意な差及び競技成績との間で有意な相関は見られなかった。このことより, 練習場所については練習状況の平穏度, 流れ, 距離, 巾などレース場環境

に近く、そして気象等に左右されることなくいつでも練習できる状況が望ましいと思われるが、特に現状では競技成績に大きな支障になっていないと推察される。

(2) 施設及び設備について

表6. 施設・設備について

	群	平均 (標準偏差)	t検定	競技成績 との相関
艇庫の有無	上位	2.0 (1.0)	1.253	.160
	下位	1.7 (0.9)		
ウエイト設備の有無(学校)	上位	1.1 (0.3)	-.511	-.067
	下位	1.2 (0.4)		
ウエイト設備の有無(艇庫)	上位	1.6 (0.5)	1.593	.204
	下位	1.3 (0.5)		
保有艇数(4+)	上位	4.7 (5.3)	2.315*	.300*
	下位	2.3 (1.6)		
保有艇数(2×)	上位	4.5 (5.0)	2.970**	.375**
	下位	1.7 (1.1)		
保有艇数(1×)	上位	7.6 (6.4)	4.023**	.479**
	下位	2.7 (2.0)		
艇の充足度 (保有艇のシート数 ÷部員数)	上位	2.0 (1.6)	.661	.085
	下位	1.7 (1.8)		

*P<0.05 **P<0.01

表6は艇庫及びウエイト設備の有無、各種目毎の艇数、部員数に対する艇数の充足度について群別に示したものである。

なお、艇庫の有無では「1.なし、2.他団体の一部を借用、3.共同艇庫、4.学校の艇庫」、ウエイトトレーニング設備(学校)、(艇庫)の有無では「1.ない、2.ある」で回答させ、1.に1点、2.に2点、3.に3点、4.に4点を与え集計した。そして、艇数の充足度については保有艇のシート数を部員数で除して艇の充足度とした。

群間で有意な差がみられた項目は保有艇数(4+, 2×, 1×)であり、上位群の方が下位群よりも各艇種とも多く保有していた。特に小艇であるダブルスカルでは上位群は4.5±5.0艇、下位群は1.7±1.1艇、シングルスカルでは7.6±6.4艇と2.7±2.0艇と、上位群の方が下位群より約3倍の艇数を保有しているという結果であった(p<0.01)。さらに、ダブルスカル艇を2艇以上所有しているのは、上位では97%であるのに対し

て、下位では56%、シングルスカル艇では100%と69%と、上位の方が有意に所有していた(p<0.01)。そして、これらの保有艇数と競技成績との間にはダブルスカルでr=.375、シングルスカルでr=.479の有意な相関が見られた(p<0.01)。

これらの結果から、ウエイトトレーニング設備については、上位群と下位群間に有意な差はなく、その設備充実が望ましいことであるが、現状では上・下位群に関わらず多くの学校が学校もしくは艇庫にウエイトトレーニング設備を保有し、特にこの設備の不備により競技力が損なわれているということはないと思われる。

しかし、保有艇数に関しては、上位群の方が下位群よりも舵手付きフォア、ダブルスカル、シングルスカルの各艇数とも有意に多いという結果であり、競技成績とも有意な相関がみられた。このことより、競技力向上に向けて現状のハード面で充実を考えなければならないのは各種目の艇数であり、特に小艇(ダブル・シングルスカル)の充実を図ることは選考レースの実施、オフシーズン中の小艇による練習などにも影響するため競技力向上を図るには重要なことと考えられる。しかしながら、艇の充足度(保有艇のシート数÷部員数)が上位群と下位群の間に差がみられないことをあわせて考えると、ただ乗れる艇があればいいのではなく、強化方針を立案し、それに則り艇種と数の充実を図ることが重要と考えられる。

5. 協力体制について

表7. 学校の協力体制について

	群	平均 (標準偏差)	t検定	競技成績 との相関
学校の部活動への理解	上位	2.0 (0.6)	.849	.110
	下位	1.9 (0.7)		
校則による練習の制限	上位	2.4 (0.9)	-1.681	-.214
	下位	2.8 (1.0)		
学校関係者の精神的支援	上位	3.1 (0.8)	2.705**	.332**
	下位	2.6 (0.8)		
学校の経費・物質的支援	上位	2.7 (0.7)	3.617**	.427**
	下位	2.0 (0.8)		

**P<0.01

表7は学校の部活動への理解度、校則による練習への影響度、学校関係者の精神的支援、学校の経費・物質的支援について群別に示したものである。

表8. 保護者の協力体制について

	群	平均 (標準偏差)	t 検定	競技成績 との相関
保護者会の有無	上位	1.8 (0.4)	4.273	.485**
	下位	1.3 (0.5)		
保護者の部活動への理解	上位	2.4 (0.7)	4.730**	.485**
	下位	1.5 (0.5)		
大会時の保護者の応援協力	上位	2.5 (0.8)	3.847**	.517**
	下位	1.6 (0.8)		
保護者の経費・物質的協力	上位	2.7 (0.9)	3.415**	.479**
	下位	1.8 (0.8)		

**P<0.01

表8は保護者会の有無、保護者の部活動への理解、大会時等の保護者の応援協力、保護者の部活動への経費・物質的協力について群別に示したものである。

表9. OBの協力体制について

	群	平均 (標準偏差)	t 検定	競技成績 との相関
OB会の有無	上位	1.5 (0.5)	1.871	.234
	下位	1.3 (0.5)		
大会時のOBの応援協力	上位	2.9 (0.9)	.825	.128
	下位	2.6 (0.9)		
OBの経費・物質的協力	上位	3.1 (0.8)	1.574	.238
	下位	2.7 (0.9)		
OBの指導補助などの協力	上位	2.8 (0.9)	.324	.151
	下位	2.7 (0.7)		

表9はOB会の有無、大会時等のOBの応援協力、OBの部活動への経費・物質的協力、OBの指導補助等の協力について群別に示したものである。

なお、学校、保護者及びOBの協力体制の各項目は「1.ほとんどない、2.あまりない、3.どちらかといえばある、4.非常にある」で回答させ、回答したそれぞれの番号と同じ得点を与え、集計した。

学校の部活動への協力体制に関して群間で有意

な差がみられたのは「学校関係者の精神的支援」と「学校の経費・物質的支援」であった。「学校関係者の精神的支援」では上位群の 3.1 ± 0.8 に対して下位群では 2.6 ± 0.8 と、上位群の方が有意に支援があるとしており ($p < 0.01$)、競技成績との間にも $r = .332$ の有意な相関が見られた ($p < 0.01$)。「学校の経費・物質的支援」でも上位群 2.7 ± 0.7 、下位群 2.0 ± 0.8 と、上位群の方が有意に多くあるとしており ($p < 0.01$)、競技成績との間にも $r = .427$ と有意な相関が見られた ($p < 0.01$)。

保護者及びOBの協力体制について群間で有意な差がみられたのは、保護者に関しては「保護者会の有無」で上位群に 1.8 ± 0.4 対して下位群 1.3 ± 0.5 、「保護者の部活動への理解」では 2.4 ± 0.7 と 1.5 ± 0.5 、「大会時の保護者の応援協力」では 2.5 ± 0.8 と 1.6 ± 0.8 、そして「保護者の経費・物質的援助」では 2.7 ± 0.9 と 1.8 ± 0.8 と、全ての項目において上位群の方が下位群より有意に理解もあり、精神的・物質的にも協力的であるという結果であった ($p < 0.01$)。そして、保護者に関する全ての項目において $r = .479 \sim .517$ の有意な相関が見られた。しかし、OBに関しては全ての項目において有意な差がみられなかった。

これらの結果から、部員を取り巻く人的関係で身近な存在である保護者及び学校関係者の精神的・物質的支援は、部員が部活動に熱心に取り組む重要な要因と考えられる。そして、この取り組みの姿勢が競技成績の向上につながっていると推察される。しかし穿った考えかもしれないが、競技成績が高いことが周囲の人たちからの支援をえる要因になったかもしれない。ともあれ、部活動の活性化、競技力の向上には身近な人々の精神的、物質的支援が必要な要因と考えられるので、部活動の指導者は周囲の人々、特に学校関係者及び保護者に部活動の理解を得る努力をすることが必要と思われる。

IV. まとめ

高等学校ボート部の活動環境と競技成績の関係を明らかにするために、全国高等学校体育連盟加盟のボート部を対象に調査を実施し、平成9年度

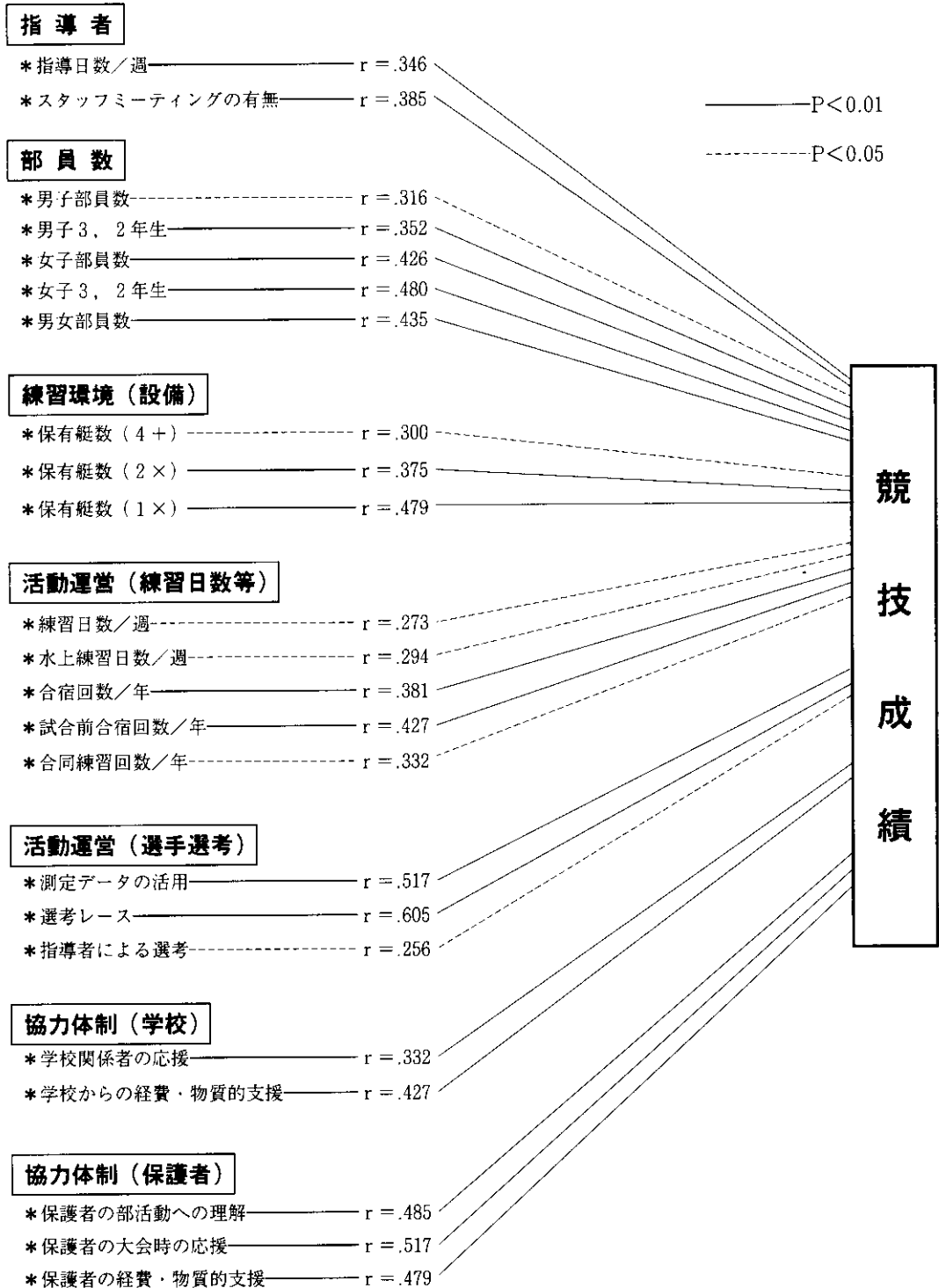


図1 競技成績と有意な相関関係が見られた質問項目

全国大会入賞30校と全国大会県予選敗退32校を比較検討し、分析結果から図1に示したように競技成績と有意な相関関係にあると質問項目が明らかになったことより、以下のような結論をえた。

1. 指導者は指導日数を増やすこと、そして複数で指導する場合は、スタッフミーティングを行い、指導の継続性、一貫性を計ることが競技力の向上につながる。
2. 練習においては特に水上練習日数を確保すること、さらには試合に向けて合宿を実施することが競技力向上には効果的と考えられる。
3. 部の強化方針を立て、それに則り各種目の艇数の充実を図る必要がある。特に小艇に関しては艇数の充実を図ることが強化のためには必要であろう。
4. 部員数を多く確保することは部内でのよりレベルの高い選手の選考、競争意識を引き起こすため、競技力向上につながると考えられる。
5. 競技力向上には部員の周囲の人、特に身近な存在である学校関係者や保護者の精神的・物質的支援が必要と考えられる。

謝 辞

本研究の調査実施に対して、全国の高等学校ボート部顧問各位には快くご協力いただいたこと、ここに記して感謝いたします。

参考文献

- 1) 競漕規則, (社)日本漕艇協会, pp.31-39, 1992.
- 2) 航跡—全国高体連漕艇部45年の歩み, 全国高等学校体育連盟漕艇部, pp.241-246, 1997.
- 3) 川西正志ら, 一流スポーツ選手のキャリアパターンとスポーツ環境に関する社会学的研究, 鹿屋体育大学教育研究学内特別経費報告書, pp.57-72, 1993.

(平成11年4月6日 受付)
(平成11年6月8日 受理)